

満洲の悲劇とウクライナ

ウクライナのニュースは、満洲での悲劇を思い起こす。1945年の第二次世界大戦が終わった後にソ連軍の満洲（中国東北部）侵攻があり、満洲各地でソ連軍による日本人への砲撃、暴行、略奪が起きた。ソ連軍の侵攻により支配されたウクライナの町の惨状は、満洲で起きた悲劇に酷似しているように思う。私は五歳の時、瀋陽（奉天）の満鉄社宅内で、秋から翌年の夏、引揚げまで過ごした。高い塀に囲まれており、2000年に再訪した時には昔のままの社宅が残されていた。市中には発疹チフスが蔓延しており、ソ連軍兵士達が徘徊していたので、ほとんど社宅の塀の外には出ずに過ごした。休日父に連れられて街中に出た時に、ソ連軍兵士がマンドリン（機関銃）を持って立っていたことが記憶にある。

父は、社宅内に住む若い者達と一緒に、強制労働で、市外にあるソ連軍が運営する工場に働きに出た。腕に腕章を付けて隊列を組んで歩いた。最初はソ連軍の指揮官は、威圧的に白刃の日本刀を指揮棒にしていた。しかし日本人達が片言のロシア語を話すようになって、態度が変わり、黒パンをくれたり、帰りには石炭を鞆に入れてくれた。我が家は、寒い思いをせずにすごせた。

ロシア軍に支配されたウクライナの町の殺人、略奪、暴行などは、ロシア軍が認めた行為、組織的暴挙だと思う。ロシア軍の体質であろう。昔も今も変わっていない。ウクライナに平和が来るのは、軍事的勝利とともに、ロシアの今の体制が崩壊する時である。ロシアの内部から戦争反対のうねりが起こり、プーチンが消えることで、ウクライナに平和が戻ると思う。その兆しが起こりつつある。

（高知新聞 2022, 10.12、声ひろば掲載）